百六番
三博
光文部
へ13
1310
2

鶯日記二編序○

古より誘ふ屋翼を借りて毎屋を取ると
いふたとへあまたどもが師匠訓導八雲文
其懸命から門葉ぶくを為永の戯
号をおくり門人が師匠ぶる門葉の俳
まも俳諧の春の一字元来師匠ぶるまもる
御あんで劣らぬ才子の連六毎度不通の

門 へ 13
1310
3

口前上手連寸に對して常の詞も却て師
匠の門人の影よ七尺ばかりも高の戸と陸
がせる例の生得なる高の字の人の高に
あるべき筆の教訓あれど狂訓亭と自賤も
見識なるべし軽忽なる花押のきらぬ損徳有ど
謙退なるべし一家の達者当今無雙なる
人情箱古代ゆまれる一流なるべし

梅麿よ對そる春告鳥辰巳の持の手
八幡達四方よ郷るき如作新案既て人
情の極言を著されしより以来小説合巻旅
日記とまりふはいて流行て遠て大人先生
の名家迄つひよ中形本を著述事ぞ
なるべし嗚呼予當の師の名大なるかと
身ぞいき心の感得ぞ中門葉光愛

春友子が谷の戸出に鶯日紀梅の香よ
日ごゝに紙撰む販元乃發販を壽くとて
思ひの儘をあゝゐ志るす

人情一家の大先生狂訓亭の門子
尾州一ノ宮
狂花亭 爲永春蝶述

春英

清花

海棠
梅
桃
桜
狂詠舎
春暁

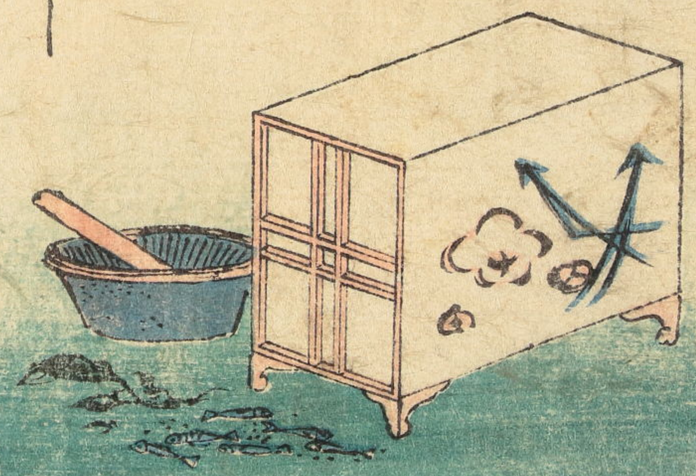
山
苦助娘
榮

金太郎女房
安

松園　千春

なかけ　けつ　そふの
初まる　成　まつ　ん　こく
すゑ　家　さ　ち　ち
かる　ぶね　の
うぐひす

雅　春
英　山　筆



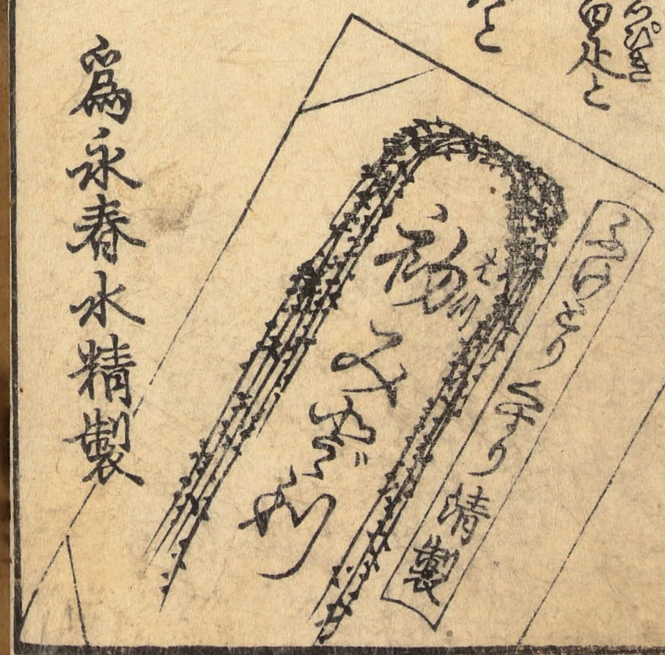
春色鶯日記巻之四

東京　爲永春友作

第七回

仮田の磯山の汀辺りの大御若勇といふ者あり魚せ紀せば
黄ず絲長ふ住人て家格も中者ふ一き武士うしぶ故康
あつて浪人し此所ふ移り住早一年ばかりてれど這ぎといふ
活業もわるねバ御くふ身の上衰微當国ハ昔の陰もなく
破屋ふ破傷ぶ踏微ふる烟りも仔くこと一ツ

竈土支吳うれ憂身の上う沫雨の泡きのこ人乾干こう
そのこぶけ
こころう捕も四斗樽の箍きでこれて其樽一の口敷も裂しく吹
樽の底軒の縁搭みの破文古金一百疋と
新しる文字きえ彼今ぐ有こうぐと
愚ぶ様な男ひも貪苦の世常
不自学ひん方も亮相を僅きを
女房世間ふ対ても悼や
嫁うればとを卑世き



爲永春水精製

振盛りの年をもて児持とうこ一洗命け身と偽く雲
落て形容の俺住つふちけぬ業きでも骨をこ一
きぶどそこうとこそこうこうこうこうこうこうこうこう
のつが世ふ化粧しる折もこ一世帯深る併もこうき
艱苦のこうこうふ肌もこうこう中ふ屋や我よ八三男の
骨なこるこ人でも可色とのこ一公で身つも親の秋
閉こうこ身代こふ夫婦しとのこうもちげきわのごこう
覺えこせこる行こ義こう人こ人見きびぎここと別こう

節ハあぢ〳〵とまれ〳〵まくより愛敬のこぶがまろ振ふ
行末を父や母やとあてにいつく敬うく愛へ余余すく仮家
あてる目をさめ〳〵法まてお蝶ハ背より兼へ抱へく乳を
含ませ　ヨよう〳〵寝つて起さのうへ左振ぶらふよ
ひぐ〳〵見ぐ出で〳〵来さうう　サノ〳〵　お巨　縫へ行て温養
あうへョかんふ子へ着物もどへうして　モノ一ツ子着せ　変と
思つても出まる　訴ハ今〳〵　金仏の鬼が三枚ゑるあまう
一枚半ぶ〳〵わで蓋〳〵まと　仕振ふよぶうれんまつく〳〵たる

ものヲ摘みをぶ〳〵ヨョせあて小清浄と洗濯でもして
やらふと思へても天気ハ続く悪〳〵かんふるとぶ
けまでお屋敷ふ居さ時ハ陸ふ世間並に外へ連て歩り
てき振う〳〵ものよしてあるのふ　蓋ふ仕ふふハ宜ぶ
ころへふぶョ　苦〳〵大遠年寿ぶ〳〵ことをいつぜあつちふ
居さ河ふハカウ年齢をいつれ〳〵ようぶあつぶ苦労斗
をる甘へう仕演ハみつもれ人やどきせ〳〵きぶ　ヤ
それでも仕ふぶ　ちぶ〳〵可愛そうぶ　まへあつヲ

お茶さんが仏奉公をしてゐる時分は男女まで
ねんごろに用をさせまして気の付かぬことなどがあっても叱らず
まことだろうで海でいきてまいりましたけれど此みを産でるもの
は振ふが落ぶれて手も當らぬはりんが水うち落さ猿のよふな
どんなふにおもうもうもうさろふ漸と宝ふ屋うれてきうづく
振ふが私はてきとうふ男のまんが生ハ功者ふうて
ぶらぶらしいことを言ふ苦イやるふうもうふようり
別ろと教へて歩ぶが遠ねん大概お内宝さんハうるハ

ねん　ハて　お養ふあづうりまして　苦イ　入れまして
入るのあづうるのと申ようとのハ止ぶがいく　織ふふいうあハ
ねんヨ　ホンニ　お茶さんもまろう町風ふおるんなとろ宝
ヲヤ　嬢やそんふふそねてハいけるへヨ　ぶうとしておいで
後生楽なんざノウ　苦イ　おれもまいらべんも拵気ふ
ふうて見てハ　ものざそんふうさざ楽ぶうとろざうふ
とのハ　此ふ児ふ　百姓　親ふつるがまて拵さい者ふ　不孝ぶ　気と
食ふ　劣と形でセて　ふうぶう不知ふ在るものを不便ぶ　一

時日と共に流れば数方々に不自由させるもようくを
黒髪の尽くさ如どやうれ人の已み七枝つけさ者も学て
成人する様ゆとお業と号ておめさのも言葉かうこ
時とぐこ神も仏もれ人こうとらくめく今人まで
美もうくも紙うで居る物の始末も紙ぐめこと
あってうう人の真似でもあて見て人ぐついうう仏様
よくやん法さんハ仏を持ておる仕ぐうおるふも覚て
やれやん仏所のみハ如何ぐうう通りのあと様へ
ろこ彼も度毎ふ不成と言れるようのくおれが様ハ
仏様ふ彼ふ ちらちと人情を覚へふ
あさぐって撫并でも氏堂でも河花のものかーうよ
お見様山もあるうくよ世あて実まぐ まめくとおまぐ
三度の飯を喰ねくでもどふぐをお業ハ安楽よ暮うせ
度と思ても今の身ぐでハ中く叶ぐ
う一俱く苦労をあてうふ福頼ひても有るけや
ひくと来のまでまで考まバ世まて居るうくハさこも様

ト ホロリ ト 涙バお袂も催ふし涙をふき 〽よく〳〵お金
儲まれる因縁とおもつてござれ まづそうハ子孫の繁昌も失
涙お金でさんざ憂目を見せられたら 苦労災難とハ
云めへかう主人の仕事を頼まれ お役ハ不運の尽ごろう取
金子主人二包 盗まれしそのハ 此方の言念 百両なる十の
なうハ身を沈めしても 調達して納させハ 何れとも其
穏便のお慈悲を願ひ どふぞ其方も 死なふよりハ三百両を
りハ金ハどふでもかふでも 出かうしハ始末でどうして 拵ふ

養はされて男の出てから喜び囲ひしいつも元気豊
を仕つくして 我後に見のまゝに 諸道具までも為
云まゝに それから断りく 気が付て 奉公大切と一所に
勤させ故 先あの様に出世ハしてどこでも丈夫けあれも
かうし役もおめてをする由緒ハ男女もおつかねバならぬ
始末人の出入も多く 喰ふ呑ぶりして行けバ 益〳〵
肉縁ハつまつて来る 其うちお堂ハ生れさ所 女房ら
も惣領あり 近所合壁 つやゝか 親つく くまでも 逸

れの
後もあつさうとしてく結髪も世ごとに我儘のもとうこま
ゐけまバ不成場所ごとに折ておくと借金もてごつ
うして二十あまり丈よう以ての借高を合せてちやうど六
七十金ばかりのものの結ひ人所で彼笑絵ハ浪人を宮人
引戦早くうけうどもハ寄集り七重の膝を八
重ふりまびて日延を願んでもモウ先も同様ゐ稼人
うう瓜の垢ゐども関てハくまぶと余ぞ残と
瓜を賣代ゐて佛門ても中〳〵追付冷ぞのねへ西と
あつとまるしてあるても生ぐ後の行分ぐ今日まで暮
きふ店賃も三箇月ぐらい溜ゐてゐるのハ暮
も薪炭もつくて来ぐ「お常やちつと居つて
あ至くく行燈をつけて又抱ヨトお常を
膝ようおろして立ぞ出るとも出しげハ抱おして
火をうつ「モシエ今乳の飲ぐと抱ハ中主のでハ
ぎるませんが是うハ嬉くのうけとどゐして居海
ようと出ひまさるまぐ上トト医師のそバへまうぐ

再度お業を起こし　はばかりと　猫島様
つくづく思案の　徳果　善　そのさ買ぐらの所へ
そんなお　清みも　れ人　こ　付こうづく　やまりて　退く
取こく　黄こんが　古備の　ものふ　ともも　かうの　ものを　成
ずハ　行ふつくやヨ　ここヨヤ　おあきん　そんこう　お代
宮こう　四へ　苦まで　落つい　くあ　出こ　こるの　人　苦
ハヨ　左様　ここどふ　こうこう　役人の　おこう　松で
行こう　沢が　附ごろふ　でハ　れ人　こ　「ア　考て　出遍

ときの　まこヨ　私ハ　そふ　おふ　いかこうが　ようこう　ふこ　ふこ　ふこ
ふこ　苦ナゼ　ここナゼ　ここて　私ハ　婦人の　義ごこう　お役
所の　ところハ　おこうま　せん　けまで　出入を　おここう　おここ　ふこ
めこふも　掃こう　まここ　ここ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ
見　こまこ　まこ　喧で　こん　あけ　いこ　こ　こ　こ　火の　消こ
こふこ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ
んの　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ
ここも　ここで　飢　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ　こ

ませんハま　苦　なるかど　まあのいふ通うところも按ねへ
でハねへけれど苟且ふ言て関せうう撥を洗ぶうへ
うんが何の中でも乳の毒で実ふ思へ前をあるま
まも世で今日可申う明日いへふうと思うこと変も伝
簡変とうへいめとまでハ出うううさが面白を見うと描も
寒うまあも厳を不情ふあへ世へこと知てうれうふ代
変どうへ言並て是まで何ともいてうんぶが出帰ふ
いふうう法のを悩て中て今日ヨまとをあうて頼うう
こなぞまア面白さんハま猫ふ遠ふをして優あるを
作どうへうんふも私ふ意を盧をして苦労をまうる
ようハどぶあませんヨ何猫ふうとでもお言ふあふ工
トううみ変めていふとまうべし　苦　サアそふ真面ふ出
かど鬼でも蛇でもひどうへ猫更何ふも言れへ拾て
是まで絶ふて度ふ赤へふ合うるもうへ暮ふあ
まうう仕猫ふ不要ふ人ともふ貴様うと縁がれも
兄ぶ面目ふへ何へうどふも十分ふ使ふうれうと義理でも

ものうりみふ又仕方を改て見て是でも高く買ねと
ものうりその時ふ再類こゝヨヤ子ん子ふもとこ吉
藏みるふのと人子ハ然うれあしうれ活て西覽ものう
ものと支ハ樹ませんハ子然而ふ疑のものと異が近辺
まるつてまぐ赤さんの気を和らものでハ子人番
間様して在ましたるの行狂してまた猫ものとぐあります
ものうみれも私が猫ふ落ものと支がれば来ます
言ませうハ子子ものんぐろみゆ支て歩下まるヨ子五五

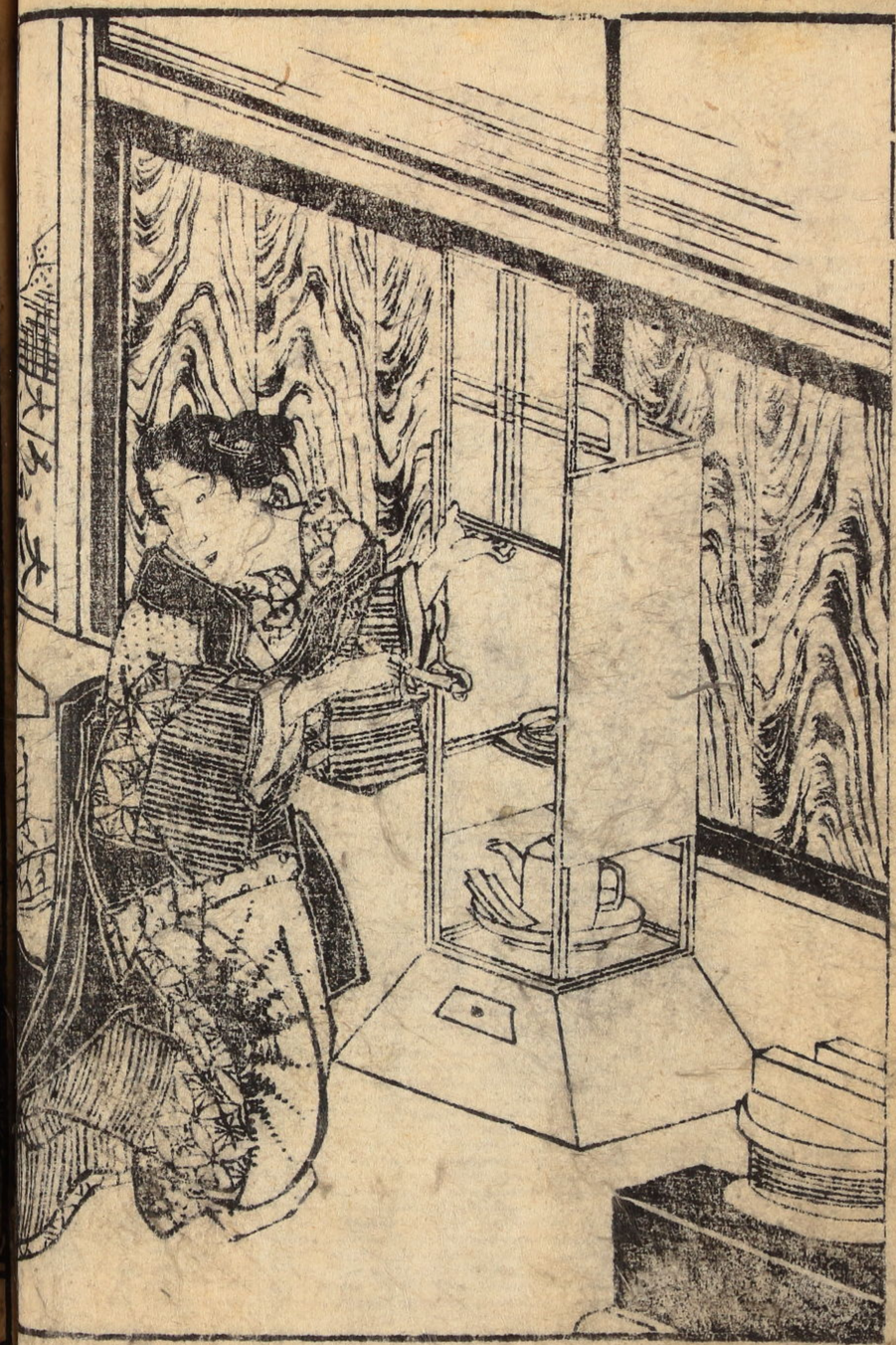
り工苦折角ものふ言てくまるものを却ていと
ぐふ居うう気ふもうるぐらくふ嘶をガナるるぐ
根でくまるナヨ解すでもねくが斯まぐふ困しむ肉ふ
飽もせぐ子ねく子を使ふして連藩く居てられる
のハ奪ものも嫌くのとも猫ハ肉ふつくされねくが
羽豆ガ支覚も盡果て子ガ路辺ハ迷くの人覚悟の
茶で子様ガものとお呆ハ成ガ丈け凌ガまるるる
凌てくと頻と工夫とて考てぐ実ガものとお肉法づくものと

戸を叩きけるとト言のハ弟が得ぞ傷ましナト初言葉て
みるとりしゃ思ひまうて「雖思ひ」ぞ思ひまうてハ
行てハんれやうと言のもいとぐ世ねあげて男抜わぞ法
たりけり

第八回

當下お蝶ハ渚倶ふ嘆きハまれど雖きろと住ハ夫の
深情ぞと推察られて中〳〵ふ恨む氣色ハまみけれども
猶ふ慰ふ泪をぞ慎きえ世ぐき神の霊ふ涙てぞ

厚〳〵かゝるる親の恩きえ孫節の霊て重し抱きー
を意地をも行りげふお家ハ太親の色ハ見れど嘆ふ
況〳〵老まぐき風情ゆゝねバ鬼意ふも不審をきろて
林しゝも按ものゝきよんがりと持ぶきふ猛
き捨て太親の分野を窺ふ猛子も表れ見ふ機
慎と見るる見ふ〳〵と彼方此方の顔覗きかやう
言て養毒と夫婦ハ一向言もなく泪ふくまで住ー
うバ乃方ふて逃〳〵ろトットぞろふ泣ぐぞ



夫婦ハもれと長づき法四と人ハ後まねバ先
相伝ハさて置くお蝶ハお菜ハ乳を呑せ抱くこゝ
ろも安堂う明びづくも断くとさう寄ら
中ハ分るお菜ハ家こうしふ後元へ下てゐ保暖
再若動ハ後対ひ　モシエお茶さんハ私と潜伏ハ
おのく偶搗びをさせるのハト獻くくてこゝ法切ハ
私でもこゝれハあませんけまで私ゞ里人まつこう
そてマア　お菜さん一人でハ分ハ分ハもゝ私でお在

きこゝ人お菜も私のこゝを教てハ
ゞきまゝゞそハしこゝ所ゞおあさんの身ゞ搗くこゝて後方
のお金ゞ返されるものでもこゝ出入も出来ひよゝゞハ
若万一お茶さんの正直こゝ義理ハ迫りて仕方なく取
ゞ者こゝ支でもこゝさるんでゞこゝあませんえゝそんな
支ゞあつて世覚こゝさるの根私ゞ里人帰こゝ所ゞ絶も
あれも去るものをもつて五ひの得心づくこゝ解義
こゝこゝこのゞゞこゝ左様こゝ後ゞひこゝと

人うやと拾ふ次ふまつて出たるさいふ駄ふ残つて箇様
ケ様ごと聞者の臭ふとうとうどんふ迷しのつわれま
せんふまま戸叫拾ふ縁起でもないふを先きつて言の
でハござるませんが婦人の狭い知恵ハ拾て見きバそんな物
ハ出でなけまぶ永の旅でもなきるのうなふしても早くう
親ふ子の見ふる拾ふ業をバ可笑そふごと思ハきそん
のう苦くうとうくねくとぶ在りのう児を血をうけて見ごなを
そまごふとうとうものことハ我が側をうま放してまものの

との所て出業よふとぶハ迎も別まるくうのうち私ハ
実家へハ帰うませんヨ苦く実家へのうぶふ行まるのぶ三
くく所径どハしてもうくうてもらうくうまうさごの猪
ハ見非角孫とふうう思所て在うのさそれで先刑も
ぶうくくうくうくう行きうと吹のふ支でのきでご
ぎるまたぶ行幸私ふ苦臭をまを書て然而永さ今を借
と所へ返くそんきのチ苦くどふしてくくどんご支をいのぶ
ア弟一そんを筋ぶあつてハ故里之對くて不決お業をけて三ふ

乳がみつりてハのけるべナ　へ幸ハ向ふのお山さんが乳ふ持あつ
かりて在るさるうゝあもさまハ田さうみに遣ておもるみさんれば乳脇
お米さんの側ふ置も同うすてぎるまたゝ　お山さんの乳でも
皆さんが揃て情深へうゝ可愛ごうてみさんてうんなさいまをゝ
ハ　苦ハムウあもさん遣りてあけば猪ゝの寄ぶるみも及ばねゝ左
拍しゝと日うハ里投持を遣るの小生をゆるのと則新しく
借金をして国ゝまれ人けまべうるめゝが　イ五十位ゑ才光
ハ曲輪へまれバお宮ふ出しんをしてもも月ゝあうてようゝ

苦ハ　お嫁や折角の貴ぎを探でハねゝがゑ　社考て見て
ゝまさうョ半とお宮ゞ銀箱を取ふ乃ハ建けれどもゝゝてうゝハ
世の人につゝを曝して歌を探しゝ敵りのふる節ハ親の名
前ふ泥をつけ憂私うをてあゝゝと涙を張うう乃中
あてゝ見るうを伝ねゝう社ゝ知を高付てとゝくと思案を
つけて見ゝ考と言字よゞゝうゝ及ゞと帰がゝ　えて生ゞ
常住も米も頼て在てうんが貪苦ふ迫ばゝとよもや
あれもゝハあゝゝつまふ知るのハ嘆ようもも止て

人生「バイ生涯ようふも有まちやうが私ハモツおゝ弟さを
きちたう取扱て来りまつと苦労ハ多
国でおんなさのまつ異くもおい弟ぞんが田外中私ふ中
とのハ此度おあさんがお屋敷をお暇が出く見こ郎ハ出ぎ
借金の残りもあ扱ふぶつ是うう町ふ居く行ち事愛ふ
かくるまでハ随苦つうふそんな中へ借金取ぞといふ
のハ人の隨為とのも不届狂ぶ出ぎもくねこぞぎ
取ねバ危いう取ぶる人返ぶ来ぶ尚もくふ来ぶも
御ぶ来ぶふのれバ給る度まぢふいるつふ涙の涙で暮のも
絶暮れで苦ふりふまで出来ても序ふ見捨る様ふ
ふうふのぶ義ふもそんな私ぶバ御ぶ操を破ふみョト
言れふるも住まつふまり郎ふ私の身ハ男ふ
切つて居まつふョト涙ふ知せるぞ表れふて

春色鶯日記巻之四了

花の盛に
月はくもりなきを
のみ見て
あるかな
英泉門人
春齋英貴画

春色鶯日記巻之五

第九回

東京　爲永春友作

再説お蝶は伺ひ又擬を言の葉に親の教訓今更身に當たる心地して「アノウ父様さんの言まして」

夫一旦嫁入りの実家を死で出さと思ひて何所とも身の隨に成て男姑の位牌をも実の親と思つて香花を手向て拝んで居ろ元来嫁ハ遣帰ると言ふ事は

記ざ通りふして遣ひ捨ても構ハぬ乳で責使ふ事も度々ぶみ呼ぶ事も呼ばれつゝ実を立てまれるとみんな世界ハ聖とする嫁とする事も結構ではあるけれバ家へ行まるものでもあるまゝ実の和女を結ぶ婦人ハ両支ハ不見と言て亭主の乳ハ赤入りて出さまるの八繼令嫁ハ利が見ても繼嫁さまるの八女の身ハ

どうして此上もなく亭主の和まれバ戦ふも結て結婚

やうハ出ろ言のを推て根ハ見る矢張

あれが不便と按てくるまを乗せるのを
言て笑せるのを 計て金子の強と高振
ぶる貧乏のつぐ〳〵亭主を眼を貫ひあるひ亭主の
行跡ごころの貧乏ぶるのとなりて
言ものでまを猛る娘の言ものを成ひどもんなるの文
てば帰て置れる帰りて来へもんなるを永く来ても
不安ごころ再縁ぶる有るまを家へ入る妻よりの付ごとの
親ハ欲ふ貧ぶ人と義ふ人情で実正ふ人情で実正ふのを

言とあるのを数つるの実ふ我ふがかとのくるを女の名を
出させく奥女の名をば宗代ふ名のが実正の親の情と
言ものト 徹義を猛る 猫洞ハットおるふ法ふと言葉
まるば洞をば吞込〳〵 安ふ〳〵 苦一二ふ蝶やモウもん京
法〳〵〳〵とるナヨお栄ぶ貧を覚ると行ねるを辞に法ヨ
モウ法ハまるせんヨ 苦〳〵まるのの茶 猫ハ宣ふ難を妻行ぶ
然まで娘ふ異ふ見〳〵 ハ奥を 佐て 仕ども 儀ども
武士の義地を練て頼ふこと 洞一滴 翻ハまさる史ぶ役の中

ばハ嘆愛のてお仕なさろうよヨ笑殺ろう
西月ねえコウお蝶や丈うう後ハ行と言ふまろうこと
めのう後ハ簡招中まーしろハあろうーものろう丈が丈病でも物で
薬も呑まるのがあるチガふ十紀一生て言ものろうのハ工面ごろ
くろと命ごでも抱やうふ後へも先へも不行多ーあろうとごの
惜りハ身を捨て貞を全る懸めれバとごバ二四一ごふ
よろて吉男をーそも丈を助るうふまるがやくごろう番方一
のうがめらば行ハ陸り相度を仕ようめうう来てくるがて

身も色ーろ五豆さえ多けるとバ紀尊の左ごふ仍て行猫みす
あてかふ成て参りしらいが知りての通う手方を早くも嫁ける
くるる仕合でゆーくるふまりる手方がれふ
成程うて雅丈の寄覚をーろさアるがう天猫のるのう
成丈身を探さんようて行も知も絶縁後命と
ろうとごの惜りふる方がるへうう左孫もしも難義を救へ
呆くもくどんようふごが憂狼難ぶ情と言て他ようを
出るるそへまると親の貴人縄を消るようふ始末ふるを

幼稚児にでも言ふやうに譯で會やうもなう申ましたら
此ろくまつる内に目外お爺さんが屑縁してく候て私に
美見をして縁下ましたが此度ハモウとてもいけませんから
身を賣て国兆さんを救ふよふござゐましたと申されて許されまし
ばかりに来るまでこそ己が娘ぞ何日でも傍に使事になり
様ろ然して叫よく鄭へ行と様何て眼もに来りまするゐ
早く来い宮早此方へ来てお飯を喰うのもなつまうゐ
年季の立のハ早いけれども子將君達まゐうて行ぜ

弛走を仕掛ゐどゐ高度たゝく出て来いと言ゐ〻お栄
の顔を倩と見て脊後を向て私のあつらへ掛ゐ用を
落して居ゝまゝハト関ゝも泣吏ものも用ゐ呆し人
ゐゝしゐお栄ゝ又も泣出を所へ隣の女房ゐ酒と煮を
持きゝゝ　女　先刻ゝゝ何をしてお在のゐ豆トのひつ丈
婦の側へようお栄を抱き　女　姑さんゐ抱ゐを
ゐゝゝ泣ゐと弛くゐトゐ児を懐く抱へ入て肩ゐ香る
中ゐお栄ハ曙　女房ハ苦助ゐ　女　ゝゝゝ先刻ゝゝ

内ゐ坐て居て同じようよ笑ひ泣をして居ゝハ早く
まてゐゐようと思ひけまゐ只ゐ紙を多ゐる
やと思ひて寝ゐまゝしゐゐ持てまゐゝゝせゐて
のゐのゐ憂をゝゝすゐのくハゐト酒とゐのを出ゐ
秋さん寝ゐありゐゐ　苦　夜のふけるのもまゐゐ
まゐゐ乳を按せて　ゝ　まゐゐゐ毒ゐョ掻出して
ゐれョ　ゝゐんゐも居ちまゐるのゐのゐおゐのゐ
ゐゐゝゝゝゝ蔭でお鍋さんのゐろのゐ真ゐゐゐ

うけてうるさうまんぞく永入あせ話ぶぶ子工苦助さん
あまかどお繁さんが男ひとんでお栄の縁を退ちよ
と言ふまさるー親戸さんのあんせつも寄ふあるちやア
入りてまるもうう洞ふあさぐろてお住寄ヌレバ栄
だろうでうー お栄さんのあるまもうー 始終あるれ
まいといふでもうー年季さあけまび原のとをうふ
同居ふまうまもまるー永くひ張まぐとでまめる
まひと言うてふ文解る文うぶ左張さんまもび運の

まるのハ関ふ見へて知れてあるうう直ふ左張して
お住まんナ工苦助さんうちんこまハいうまるうう苦
あうぶうんが何のまうでも是だろうハ秋
さんあの通う陣情で不行ハ子 安真夢
どこまでも ムト情うまるいる我ハまうもサ往
まアうろうと分別をしてのあいわあつくぶ
いハ子アともくもあんまうまうーぶぶ私の持て
来と酒でも呑で明日訳をお付ト火鉢をひき

女　女〳〵ヲヤ火も消て女郎も冷〳〵ちつと見じやア
ないが出来ないト濡ごとのあとまれバくどくしく
猪まも知りて火打箱を拵〳〵おろ〳〵けぶるも
あけれバ竹ぐや薪殘をあつめて居る　お秋
さん私がもるゝ淺宮してあそおくれるお栄を
抱てゝゝふ重くらてのけまひがゝト立うる　アレサ
おろづひをあるゝて　お栄こそぢつとしゝかまヨト
おゝ曽ゝがゝ火もちのもどゝ火をあつける

行燈ののりのもちのひを　傾〳〵ち瓶も黄金されバ物を
もちあぐくいひ重ゝるべ　つけと苦ゝとお蝶ゝあてゝ　お秋
抱て内へつきて行ヨ目をさましてハくるの物ア
ゝるゝ　苦〳〵ままハありゝ　お栄ゝるさらが
ゝ　あき〳〵ナアノニ　ゝ〳〵ゝんゝどゝも左様しておくれゝ
丈ハそゝとお栄折角也　湯をおくれのゝ給ておゝる
あき〳〵ナアニお栄遠の良つぎゝと　よてゝんゝぐゝゝろ
づひがゝるもので　給〳〵おくれゝ　伝ゝしゝ　苦勝きん

お蝶さんとおいねさんの
言はれども一度不ト返事のうるさうも探を
捨て川竹不況さんとさとるお蝶が身のうへ信と
信とをくらべていづまを仏孫とまけ雑て偶て洞を
あぐりつゝお業をつまて帰りうける
爲永春夜伏てやをお蝶の親が尊への儀を
きてお蝶が苦界のつとめをきんとあれ
志を答ふ浅ましそお蝶を久せしよりを

もちゝ義和しそへ苦助も男への義理なれば
猶更ウート浅定さまもせどさるゝとも元より
女房不奴猶をさせ後ふいうれど業へうとも
本意ゝゝとお業も母のをを放変すと
いろゝ理害を解てざるしろきろしろお蝶と
里へ久まとさるもて実入きを紀をさることて
ひるまだろうハ仏孫あるろても男の一分ぐるざ
まバ身ゝ舎利不ゝるも身を賣せゝ孫

義を通れる所存はいかゝと云ふ義理と人
情ふ決着さぞまつねばふつゝび世ろもさぞ
うつゝぞ迷ふうつゝ流ふうつゝを哭泣てみく
瀧の女房をたづぬる長屋の者ゞ寄集りて
お蝶ゞ貞操を一同感じて種〻苦助ふ
教訓する終ふ細君きせお蝶ゞ実ふ貞操
貞操の一時とうう哀別の情合を細ふ
繰りいづるべきを最終七面より八田の終ふ

金ゝ愁嘆を書ふとおのれの〻合強しく
寄宮都方あへ一向意味深長もうゝ〻ぞ
ふもうゝ〻ふも思ひ之何て市退屋も
やうんうと考ふ思ふあれをうゝ思ふも
細ふあるさげまべあゝきも狂ふうゝ
あひて宜小川を預ふのゝ〻されども頼ふの
題細ハざまべゝ〻ゝうゝ元ふ蝶
奥賣の金を苦助ゞ清兵衛て戻る途中ゆて

盗賊ふ出合金をぬすみとりて 関川へ
身を投んとせしをとりとめ金所の者み
助けられ夫より 外宮河岸ふ住居と称て
行先くも出極お若衆吉嘉寿のあがりも
つくてあれバ只管を引上込入る筋を降き
更の次第だろう大略繰解ふ述られバ然演
ることくう〜

第十四

然れバ苦助夫婦ハお栄を里よふ預り向の
お山ふ折入て頼ける故お山の所ふても皆〜金須ふ
清合られバ四人日ならてお蝶ゲ身寄の支度も整ひ
ちふお栄をあづけ近の加ら彩も来ら侍お蝶を手ふせて
苦助も附添ひ宮ふ出る須ハ暮方なり都て北廓の仲
げ〜を手方へ着〜ハバ苦助ハ亭主ふ逢ひお蝶と引替に
身の代の百両を清取る途中ふて いろ〜と云の
悪敬るや 盗賊二人ふ前後を聞られ有去も言ふ

百両の金を不義盗み取りまとてせんうとする鶴に男ひ
けるハ運も尽ぬれ運ハこれまでなり盡果てるゆゑ
生て居て世上の憂目を見んよりハ一思ひに死て益
が増なんされども妻やゆゑ嘆をうけるも不便
なれど所詮存命居てせんなき鶴なれバ草葉のうげ
より言うけせんさるゆゑ今つゝ度妻ゆゑを
告て死さけども皆是までの約束なれば逢れば
是非もなしさらバ宴より眠を告んと妻のうとを

伏あぐる川のかとうふ近付て念仏唱へん縋へて
流れ花入うんとさるゝを折ふく人の通りかゝて
此様を見て閉章ふさめき後ようあうと抱留
振く貧て落つる世妻ゆゑの細を聞けるに苦助ハ
浪人せ〜婦ようは是までの縁鶴蔵みて妻様女房を
苦界ふ沉めお業を里ゆゑ思ひあげけるを宴まで篭様
簡様と落もなく次第を治りけるに男ハ〜とうけ
治く縁ゑ縁金鶴の者なるゆゑ苦助を世ふ使ふ

男ハ平ゞ雑のねくとうこと始末をつけること平と同使ふ
内へ来て坊のわくまで ぶつぶつ言ひ〳〵遅道て居ゞいと
いと念頃ゑ労アこと直ふ平宅家へ使ものの行門ふイ
戸を扣く育とくく 石郎金三郎ヲイ お安やあけてくれヨ
ヲイ お安ヤ 安〳〵アイヨ遅こと戸をあける 金〳〵おそい
ちぶよやく〳〵あぶねくことサア苦助さん遠入る女房と
あれ 奥だろうぶ他ふ遠ハ行ものも入祝ト奥へ使ものの
お安ゆも 苦助が 吉を一〳〵言同せる 安〳〵ヨシ〳〵左様ゑ

マア大変ゑ変ぶろけまエまであぶねくこと言ものもこと
ざねく お茶漬必 ぶつぶつ言ふ 遅道て お出あさんヨ
お見ものこと通ふ不遠ものこと せおこまいものこふあま
せんヨ 苦〳〵イヤぶつぶつ ぶつぶつまたイヤモ 掛こまへものの者ふ
かくこせやてとんぶ ふ苦労ゑ掛まものが行ものもかものの毒振で
ぶつぶつまた 金八さんの茶 袖こと あふも 化ものの 縁ぶ
ハサ長ものこ ぶやア ねくが 外ゑ行で 石郎屋の金ゑ
郎と 言ちやア 居ふ ち地でも 兄さんと 伯父ものこと

之ちうだきれて居るうち奥る狂言仕組ヨ
ヤアノ〳〵大船ハ乗ると気で後を大きく持づいく
手が一度でも往ねどの左あるとおくきんの御郎
きんハ遠て魚食をつけて丈うち北里とお崇ぐと
ゆくを領うと更行く始末を分るハナジ〻よく
きんの寒ち羽ぐ一うと帰るのサノウお安 安〳〵アイサ七持
八起とゆうぐ子河郎も来ちやア花も咲ハ手苦
勝きん せきん気ハおぢ〳〵で自ヨ苦〳〵ハイ有ぐるの

ぢざのまた行ふよろちうお頼やまた 金〳〵サく
一杯引けて踊ぐ飯を喰ふ世ア咲気葬郎が
ちきろふハ 安〳〵あつ サア 鍋が煮ヨ上と冷て
うう直ハ有りいろをおあぐう 金〳〵ちも川の間は
居くうふ定めてこぐ泉さろふアあやううぐ〳〵
南云姉 法蓮華経〳〵
遠〳〵ゆて見給の ちりく〳〵
蕎麦アイそぐアイう

もしもしまたまた
ぶうらうく
ぶんぶん
あさく
あられ
笑新さす
春夏

夜明て後ハ金之郎ハお縫ガ親元へ帰ね行て居る
所ハ実右エ門ハ縫の病気の家にうちふして在り
うバ枕元へちゝ進み　金〳〵ハ三ん〆で左様ハ病
気の所へ伺ふ中上ましたもこまりまして義でハ
ぎい〳〵ぶ苦助さんの変ハつきまして内相談中
たゝ〳〵て泰ゞまして　ぎのハ　苦助ガ身を
投んとしるる所を　さゝぶ行合て助け帰り申
告けるハ実右エ門ハ大きゝて服の志もハ帰れ

るの池とぞ存ずるゝと思へば
落る涙をおしぬぐひかゝ授て　ぐつゝと　泣く労る
気を取直し　実〳〵ア　夫ハ千万四度病ることゞけるゝ
ぞんじまたイヤモ命の親とも父とも思ふ恩人とも父ふ
中〳〵お礼も書きれません　ひよく　行すみよゝ内ば
對後ハ及ません　お茶の四存ぶ分ハ宜敷やまして
服ガ実ゝ〳〵ゝ　金の　ふ　夫の命ガ
つぶ志のあいを　ぞ　欲でありゝ　思ひます　右ハつ四て

いろ〳〵とみのり
きく〳〵辺入さ立ぐござるまたが形いく状でどきわまたア
苦勝が立人ふ新当を清まして山本も可成るのるう
いろとよふも 深苦を救りて生うこと存ても元より困
窮でござるし 仏ふでも侍ふるぬが金のうの悪出ア娘
ふもやはりて第一苦勝が汐立ぐ立ぐ義ふ居ご義ふ形
も志て永続く振ふ志ろとやて居ごふが正存の仕合で娘を狂
女ふいろしも仮ふも女刀ふて居れば三人へ笑まるこ第ふ船
ふあづうまるこよふ搭乗ふ傳 先祖の家ふ海を付てふ士のア

分ぐ立まるんとまで娘を入新さ入いろせば手延を上入居て仕
ろいまたうう髪結ふるうとも貧者ふるうとも苦しうござるま
せんそうの沢も娘ふ心さ也て遣ごも只今ア通り貧のう
由志侍ふさ入るうばどの振るも私ぐ世活をして生ごこと思ひ外ぐ
貧ふの宅ふも汐居ん位でござれば中〳〵如底ふ及ま世んうう世ア
娘を左振もして才志を渡て苦勝を引立振と存さふが女のの
おいでイヤモ撃る入りまること思うう仏振して然ろふ和ろんど番
義いろまたテ金八ごろも山ごさ入でござるまた苦勝さんうう具ふ

奥様が御娘子さまへ御作対を伺ひまして實に武士気の御気性
合を思召ての内意母を名代に御仕体して此内の御訳は嘘らしいと
家内とも中夜番で泪をこぼしましたが又御存じまして若助さんの
御作りに勘当されし女房の亭主で見ても負かも勘当
されたも同じことヨウ御勘当されたとて世話にもなられぬお入も
されませぬ内にこのお耳に入るのは止めし黒と御作出しが是非
旬内ではみんな若助さんのお為に御成されるのでござりますでも
御相続をなされますがまりませんお前面倒で路の所は御様子も[illegible]

まするが先一端は御受合申ましたがやりませんと申てよつまして ござるる
まへんが私が御請合申にはけして芝居相は内密に不成が宜おざるる
また只若助さん初お娘子さまでもお孫さまでもろ保折れ私お世話
お里ででお任せ御下さりましたらば其氣で私も内證表向くお世話
致しませんがなるほど心持ござりまするかとんでもなさえ内々表向お上
甚之丈で宜ござるかと承知の実右衛門も金吾殿がお聞なさるを感じひさ
まつ彼あと頼みける
扨お蝶が北廓へ行おなじみ実右衛門の所へ眼を出し行ゆ未の如[illegible]にて成て

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

春色鶯日記巻之六

第十一回

東京　爲永春友作

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

婦人の言葉を頼母しく思ひ又彼と共に
を猶更不便に思ひ彼方此方に手分して
助け借り歩き方へ廻りて五拾金を集めて夫より青楼へ三越
お蝶と逢て見て呉れと云ふ金を第八初て逢て四五日わるくれども
貯の日まで変る乱暴をしてみて化粧もせずにぶらぶらとして色も
悪く始終きつて居る第でどうぞ貴様と云ふ彼女
居るこの儀俄に化粧をして変へ来るまでこの結び美髪の色まで
出て来て第のうれしさ金を第もびつくりしてみる

婦人の言葉に感じて貴様者が落命も重く
うるに苦労をしてあげくの果て身を賣て夫を救ひ
金を途中で紛失されしと知れて泣き
いつも不言不語らへう第や言つて
悔まうと衣服ッ男家も
くも出れば遠方へ行て手紙を書て往
びつくりそと斗ふ又うり正辞きふわるくれば金
大変ぐ〳〵と言ふ〳〵〳〵〳〵〳〵

待て来い癪だ〳〵 トお蝶を抱あげ「お蝶や気をたしかにもつ
がよいヨお蝶や〳〵 金「イヤ〳〵是ハとんだことになつて何とも気
の毒でござりますね 亭主「ナニサ〳〵癪だから今におさまりませう
金「お蝶さん〳〵 女房「どれ誰でも早く銀庵さんへ行て来さ
若者「今丸助どんが行ました 亭主「ヤレ〳〵大病をわづらつて大病を
亭主「なにもそんなに心配ねへでもお蝶さんへもうそのまゝヨ 新造「かの
若者「イヤ今之ト大勢寄て抱きるうちにもう銀庵が来
て針をうつやらいろ〳〵介抱するに正気になる 銀「ナニ〳〵モウ気かつきの

保るゝ所へ静かな処へお連申して其の中お寝かし申 新造
御気分〳〵と彼方へ行て寝かしてお貰ひ 亭主「イヤ〳〵たしかに聞て
亭主「ナニモウようござりましたヨト云ひながら金五郎に向て「ちよつと来て
其所などにお居なし置 金「ハイ〳〵今の真ん中で又癪が起てはならねへ
きつて揉るならどうでもよいから一息お休み静かに渇を
亭主「イヤモウ病気ハありませんヨそしてモウ覚悟をして
男「アサ何ぞこの訳は知りませんが後に仕舞ますヨ 新造「実の
振まうてまアしヨうりく面倒でも待て居ておくれな 娘「何

ゆも一旦休みけれバいけません　「サア銀魔さんゞわ言ふん
さうゝお出ん」　「是ゞ親〳〵」と大勢寄集て騒ぎつく
奥の二ツ連て行路ふ銀魔ハ菓の潮合せ〳〵承る金子人
人〳〵ふ出させさうる礼を言ふ表亭主ふ向ひ金子ハ私ものと見
金をゆの儀ふ委敷話を出して来ふ成ぐるのまゝ又今の
ようふ成てハ出遅ゝをさせゆておきゝ乳のゝ妻でゞるのまゝうう
おおさんふ取一おくるゆ中て置ます出面倒ゞるゆの儀の紙
落つゝこゝ分ふ出ふさんゝゝ得と出ますせ成て分ト言ト

苦助ゞ一儀を願ふ〳〵と辞てきゝ亭主ハ頼ふ
頼れを貸〳〵金子二十ゝを取出し　亭主「アノ儀ハ元金百
兩でお貰ひゆ中ゝゝゞ紙貰ハ何でも出ふるゝ　宅ハ
ひ位ハてゆげてゆ損ハ出ません　ゆゝ損のゝこふゞ人の
命ゞ百ゝゝ二百ゝゝで買れるゝゞやアゆト言て見だゝハ
何の益ゆも言ますゞ亭主ゞ出でも題ゞ
あれバゆ終と言ゆ私ゞ表ゞ　ゞ黄ゞ出ゞ
出ゝゝさゆゝト金子帯の帯へ出を金子帯もゝとゞ亭主の

実気な感心して右の金子を納め厚く礼を言ひ勇んで
帰りける

此時金右衛門は実右エ門の病気の由をお蝶より深く
委く言はざりしが亭主の口留をして聞せしとあり但
実右エ門よりも金右衛門へお蝶夫婦があんじて心の引きおこす
身が在所へかへる暇で居て貞と思ても口留をして
置しとぞ

金右衛門の留守の間ハいろいろと気遣ひ　金「お安　まあおまへ……　安「……

夫でも家内打揃の秋日和を見る様にうららかになつて嬉しいが
遣てあるものを　金「なんのそのふうト　我が家を　金「夫ハそふと先男で
此両の潤も能とエコウ苦助さん　苦「ハイ　金「貴様らの廿両と
実右エ門さんがお房をまうけ二百両で漸と夫婦連を承知に撥が
めいめいぞまでの損金を取らう諸方の借金を済して仕舞ッ
こちの家主さんエ勘定を立て店を揚て仕舞うる所が近
所へ世帯を持ちまうど此裏に明があるから我仕る
とおかれ付て世話をするは両倒と　苦「ハイ思ひまして私も何卒

家さんの近所に居るうふごぞのまた金へそうそんもうそれのの
みんなぐつて上お安やお家も手後で往くれと分てよてねェョ安アイョ
私も知らくても公易くまつこうこうこの実の裏でも居てお呉ごと
大きふ冥く金へまつぐお家ぐつも竹鬼の方へ預けてぐサまも方ご
と終実正の親へ別深ご差くまつこうこ先へようて引こ分ろは
胃ご私るご如のしこうんごちうん安へ行ふがあるお家さんの更
お預る金へやうんふ彼ふでも乳のときたぐまつて開うて在ノ
越ちまふくト等猪脱月まつ知を祀り猿雪の目と行ふ

祖母ふ真目ふ相崖ト滞ふ百まの金もつぐあて惑ト
差く苦助ご借方の家ふをさして此方へ味付不独金ご
皆海せふ借金ふ空ト物も悪ふ落ふうろ苦助と美
非ごうむん所ふ所自ふ暫ふ今日の追従ちうぐしも
並べ建百泽をして立知ける鳴ふ可勝ふ是ふの他我のふ徹
ふわうけば他ふ丸も牛ふとも文ふ教ふ用もうけ和到時
美欲の西文の情ふ焼をちふね業未教人実小芸最の嫁
婆塞げ行ふ乳ふ等ふ者ふうん○間話体題金ふ帝ふ

苦助ご一緒も大方海の明るうれバさらばとて弁当ふいとう家
ゆゝしきまでも對面し帰るる店賃を拂さて此度苦助が不孝の
支ようり不風も通れぬ中とあるふ対け茅の世話をうもとても
糸屋の茅とかゝ通れて侍ば石行屋仍て近所へ引越
先此店へ揚るとて新を造宴を出直根お蔵を預るもの山が
所へも越てお蔵が上をあ治るとバ山ハれのあるき責地あて山屋
宴ふ出るとの多くるでどざるのまたまた丈閉と世間のうをもきれて
踏ず不退私ふ独別深ざるものを今更不覚ちぐの所へ参く

又活せるのが何ようつらくどざるまた丈金一イヤモノ実ふ左程ふて
おるきるのも此よのおもてどざれおるとうとうとの身ふとうとふ空ふ仕合でどざ
のまたがとまつを知すく返してお呉おるきあとゝ中もまの情とき
況でふどざるのまたが是ハ苦助さんの稼をあてと私が思込で
まるのでふ一つふ迷も世活をもるうふ親みを近所へ
屋てあをしうと思りて丈でふ入りてお呉おるきあと言情
所を怖くまるのでどざ屋またが悪うわも言れで
余りふ人を騙対ふまる奴ざと善や様でもお主兵衛れけ

いくどとなく思案をしてゐるうちにどうも仕様がない
ようせうがふかうまいて仕舞ひ関かてお呉なさるまいと
いちくどとびけれども山ナケニ左様仕作ちやアくうと私の方で
おいもものどくそうい
ありのうまいヨ受ってそんな仕ずやアなさせんが浦屋此
栄女が可嬢そんなぐらいツイ今のようなやうなんでどざるの外
仕方モウ仕ようもないなさいハ入ませんうちでも連てお出きる
ヨ金イヤモウ我言てお呉なさると宮ふなくどざるのまた
そんなこと三月のうちふ仕ようが種くお世話さるのかうまうこと

お稽古ぐらい芸事をさんとむりひ上ませうとうまを時間体ふ
おとこーなまりて兵ちまー山ハイ思うまーとすらくんど
きんいろも彩あちやアどうでどざるのまを芸事さんがうどざく
遠方ううお出なるまてお栄ぐんを抱てお出なるまても途中
で流れでもなさると困まもうてんどざるまたーそうてお役
でもきのて途中で仕ずお給きせうまとうとあが代芸ハ何ふが
ろいうう第一食傷でもきうとと成ませんヨそうて仕ずでも
小児ハ女でうのと取扱ぐ方めくうどざるの外る明日私きぐ

苦助さんふお見ふかとうまがらう　ひさよを連て上りませうヨ苦
助さんも見までいろ〳〵　市苦労を致さと上たお礼をんどと
そんなおゑづるめいりませんうちまきあまりも　金八イあるが
たくさんあんまりこを躾でござるのまるまるとせ是非とも苦
助さんを上まくさねけやアあるませんうそんをんぶを河
端伝ふ妻を上ませう　山ヲヤ〳〵　お嘉さんをんが辱くさんでも
あるまい　お方どやア夫張いけなせんハ子ア　市辞退ハ入ませんうち
私が連さ上りまるヨ　金左様なら　お新ハ中ませうを保

もうまう　市礼をようあを　山ナニ　お嘉さんどを濡で居りまた
あをト　金ト言今見ハ
お宿のくどうきあるまるこを　山ハイ代頂でハ家賃を開
くうそ　城さふ　門ふハ　居ませんヨ　金ハ分左様でござるまるう
文どやア　お嘉さんと　私ざうり　市相度をやうそ　市のは
文どやア　明日　市ふ連さ　生てお暮
するもお関りハさねハどやア明日　市ふ連さ　生てお暮
さうやうふもいきまるまること思ひまるぶ　伝言をんでござ
ねませうを　山ナニ文ハようどさるまるヨ　文の着てもたぐ

お栄ばうと丁稚とよんだと思ひてそこの所ばうでも教
のハ者ぐうをせうゲ糸ふ仕もみ細もめりませんあサ金ん
ゑうお帰りの第四郎中まだ今暮お用ふ急と来り
とんどざるまんが来内ふも猪方の桃や仕ぐさまつて
在まだうう仕事お栄さんうう四郎お帰中まだ山ハイ
うこうまうまうこトいつへんを吹ぐうまを探ぐまりつてれく金
おや明日栄の内へ仕ぬまんとまるのごョ栄アイヨウトわかる
て　金へくいくお言ごトつぐ栄の金へ宣ハがのハ宝殺りんゴョ

まのこうこうこうこ手男ふ所うう宝義まで青機の実母ふ手ままくごトこぶ
身のよふ門蓋てもみこうふめハ持ごれど狂乱人の
こもものこうこうこうこうぶ世のこうこ湾て初もめこねふぶ旁令下
ゆも父母の手を話まて早くこうもせね正顔て仕想ふ
こうこまるハ仕ずぞ父ハあれども獨者母ハあれども北
廓へこうこれこうこうこれバこの彩もこれこうこうこうこうこうへば
のこうこ不便さふ終我初こうこ目ふうこう泪を吹ふ彩こう
眼をして出こうこうされでお山ハ目も養こ手の涙こうを結ふふ

をぜ座り居まゝうば右の大略を語るゆゑ夜明け
お栄とのうち臥ふけて

第十二回

起べ山の聖日も早く起出食事も済四畳を敷て
付ぎうら出来さんこれハ京の名ゆゑ名を安山
ようぶまれめいでちうと夫婦と見えう
らゝ宴を仕舞と表へ鍵をおろして直ぐいくヨ
ちゃ表へ人ト彼方へ行と
らばかゝるゝ〜ちうよいさづゝを〜して再仮のちゃんや仮かれ

地られねえとふて仕ろョア茶のゞの居ゝくうて沸ろて
ちゝねえのを手ぎまて手のもうと言まうゆうふ
うと思ハバ又まおを引ぎまろ中ニおまりどふ緑の薄い
めハねえ彼方へいつても折角ぶ来てくれョアこれ
ゆうう男の振でもねえ大造ゆ振を言ゞゼドレ〜
切りて出ようけようふ〜〜ざぶ美を
楽る奴どやうねえ人ト言ハまえハ勇でも性ハ弱さい枯
まえ人ゝ残りおゝきの風信が一面ふ見えて出て行くお山ハ早も

と出でとるせ偶〻出家を湯ふ入て身のうらんも清浄と
織部殿の高台寺つき女房ざうと人の目ふ見うまて
贅ふおぶひうる出家も実のふとぐうちうね者ゆ弓ハく
そのこ
ちのの形も先達て苦助ゞ変ゆて三ちくとー身を抜て
百姓の金を整へ家りこと偽賊方を欺しる金うを法て
石部屋ゆいちまでも大方佐之さを金仏行までもゆをつみ
ようとせ〜ふをきせられゞ苦助ゆ鍔が渚倶ふ貪く幕一
育うる祈と習うて伊出まで連あうくしとも和うくうね

姿ふ生ゆのふぶうふう〜異を他うう評せんうふ世も始をあ
ゆぶあんを雑ふを伊幸〜て狭いあのごと言ハ祈世間を
笑ふ風俗ゆうんうお山ハ二田うう溺さとお菜を拖うう庭
ようするまも笑も草刈の外石部屋へ沼岸ゆる石部屋へ入れを
金ちを初と〜お安ハ深ふ初對面苦助もお菜ゆさゆぐふ
世話ふゆうる礼を濃双方ゆ五ふ接授溺中ふもお安ハ
をきう世酒と肴を仕出屋へ言付て有程もうく持来る抱を
取きゞさゆ盃のやぐりて附を移ふ山ハ苦助ゆ

里雲

きのぐ御親雅せ〜を学ってうカを分てうぐまろうお菜ホ乳を
たっぷりと呑せうぐ〜も女同士絶列易く〜お辞て　安正ニマア
異へハ仕ホハ能くぐ丑　山平お蝶さんホあるく〜でござのまろョ
安正ニそ人でござるまろ金私ハ未お蝶さんれお目ホうとません
ガ早貸で大遊いく　山安ホ蝶さんとの内ておかあまておりまーョ
アア苦助さんかあるうるんぐ子　山平　金ハ〜〜つまろ
れ人とその人世話て居て金伝の者ホぐりうもえるとまるく
あやうるも和人りぐ〜〜〜〜〜〜ト知人を程のまかホ

眼を巻て帰るホも　山平苦助さんもんのうお菜ぐ人を蔵く
まろうう先の内へあづけてもお茶徒気を分ておあげョをそ
お蝶さん新へも行節連て沙て遊ーておあげョ更うう程
ぐの帯ホハあ〜〜ニ児丈でまぐ体ごうのさせくとまをトト
いうて又　山安　山安さんおまえさんも児を内縁ホ私の内へもお出ろまる
お蝶家
まーョまとホきうろのうて狭い隠ごけまぐ代り遊まい
入ませんョ安正ハイ私ホ私も来りまんうぐお前さえもぐぐ
お出のうまるまーョ　山平ハイ安正ホ来りまんョ金丈大きてホ

ぐるへチョイとよりてこ殺だろう　金ハイエモウ仏ともお精やも
あませんで　山へお宝ぐうあでヨト　お宝ハ見つとう　ぐちゃん
やアト　遠れ見毎のあまで　ぐるぐるぐるぐる　現在　抜ハ痛あねど一目成ども
我乳を　ふて子へ　ぐるぐるれバ　かまで　菓ぬて　注ぐ　苦助も
嗜や　信ぐるんお　蝶も　他ぐるぐ　言ぐ　見ぐるぐ　嗜や　嗜ぐるんと
彼方ぬ方ぐ　精ぐ　自ぐも　ぐるぐ　実ぬの手ぐ　教て　見れぐ
同年　夫ハ　華ぐぬの　霜ぐ　消て　ぐるぐ　ぐるぐ　ぐるぐ
の信言ぐれハ　現在　眼ぐ　まぐで　情て　牧ぐ　ぐれ　信実の

母ぐるとも　男ぐ　親ぐ　跡ぐ　追ぐ　初ぐ　心ぐの　ぐ　仕ぐ　ぐるぐ　ぐ
自ぐら　ぐんと　ぐるぐ　ぐの　ぐも　後ぐ　ぐるぐ　後　繋ぐ　ぐも　ぐるぐ　ぐ
ぐるけぐを　男ぐの　ぐて　ぐ　見ぐ　ぐて　金ぐ　ぐ　ハ　ぐ
信実ぬ　女ぐや　ぐ　ぐと　ぐの　中ぐ　減ぐ　ぐ　お安ぐと　倒ぐ　注　嗜
お菓ぐを　遠ぐ　寄ぐて　ぐて　ぐて　ぐる　変ぐれバ　苦助ぐ　お菓ぐを
続ぐて　ぐるぐの　方ぐへ　頼ぐて　ぐて　ぐて　金ぐ　ぐハ　苦助ぐ　ぐ
残ぐる　方ぐ　始ぐを　つぐ　実ぐ　早ぐ　備ぐ　家ぐを　ぐ　ぐ　ぐる
ぐるぐれバ　我ぐの　ぐを　備ぐて　ぐて　ぐて　ぐて　目ぐを　撰ぐみ

実み苦味を抜らせずに活業を是を仕水つゝ使ふ
切て手ゞ身とお栄の鶏の代わりにとふゝ拵で蓄せ
こぞお鶏ハ丈夫の片分をいろゝと物久ふ安き間ゝ仕
掠るとゝハ生安く清淳也く活ゝと婦き首尾ゞ
ようゞ少き中の一安拵思ひ出せば自然傷ふ猶も賜くと
成るゝハ什廓の風義も不義覚てやつき中の主旨
ゝ多くの客の様とゝ二ツ拵ハゝ母ども原ゞ丈のゝふを
苦思の測ふ入れバ臭ハ様ても心廓ゝ丈ふ拵ゝ

為も清紀とあゝゝて飾粧ハ安さん実ふ蓮葉の濁ふも
深ね心とゝうゞゝ仕ゝと露をみとのみ歌ゝゝこゞ
つけふゝち戯まて誉ゝハ天晴ゝ顔ゞせの生れつ仕
ゞるゝゝも勤を大ゝの親大ゝの丈ゝを大ゝふ思ふ
些でも客ふ仕る丈をせゞ実を尽ゝてゝゝへゞ往日お目の
まゝふも心ゞまゝき丈をせゞ情をゝて張も丈ゝ気地も
様ふ越ゝれバ客人堅ゝの差別ゝゝいと仕ゝゝき全盛ゞと
却て先ゝゝ乳を付て四付の不自由きゝゝみと信をして在

ちゝ幾ばく清紀ハ折ふしも苦勞ぶりを哀く同ゆく安否を
尋ね度毎に給ふ物ゝ商賣の足ぬもうれと金をしも
送りて行角ゆくさむるも廓と彼所の市屋河岸と
乃ち一里と十町余り清ハきれど常に兄夫の側に在如く
能も勤めて責ゝも後ようゝる吉丸せば同じよふ石部屋と
お山ぶ西を初めて再お業を頼けゝる示へまでもひとすゝ使を
為て清清を尽せゝふ見る人も又同人も感じ奇ぶ
妻子ゆどゝゝゝることをゝゝきゝ山清紀を焼とし折帝

機前ゝゝゝゝ兄弟の趣意を児女ゝ為兵へゝ必
ゝも深ゝる意ふ血逆ゝてゆゝゝる名のゝ意のゝど真剣
美業の清紀と等ゝゝゝ焼意ふ明ゝゝゝるべき名を
顯ハ異見の滝を建ゝる
満寿滝ゝゝゝゝゝゝ初ゝきけを

むゝゝばうげのうゝるべゝゝ
作者曰初も清紀ゝ信実を尽ゝ苦勞金を帝お山
再お業を頼けゝる里親ゝゝゝゝ清島をせゝ

[illegible]

動尚清〳〵[illegible]

[illegible]れバ実[illegible]門[illegible]

据使あて書信[illegible]

[illegible]が[illegible]第三編の巻に[illegible]

春色鶯日記巻之六了

[illegible]